

歴史的建造物消失の危機感から起こった住民パワーで展開するまちづくり [三重県伊勢市河崎]

三重県の中東部、伊勢神宮で有名な伊勢市に位置する河崎地区は、古くから「お伊勢さんの台所」といわれ「おかげまいり」参拝客用の物資輸送拠点として栄えていた。しかしながら、昭和30年代頃になると、トラック輸送の普及など物流スタイルの変化に伴いまちの勢いが衰えてきた。そういった状況のなか、昭和49年に発生した水害の対策として市が提案した河川改修計画は、川幅を広げるといふもので、これが実行されると町家、蔵などの重要な建造物が消失することになってしまう。

そこで、歴史的な重要建造物を残そうと地域住民の有志が立ち上がり、まちなみ保存の動きが起こった。地元ではNPOが中心となって、拠点となる「伊勢河崎商人館」を開館するなど、地域住民を中心にしたまちづくり活動が進められている。



伊勢河崎の歴史

三重県伊勢市河崎は、勢田川（※）の中流域に、戦国時代初期、地元の豪士・河崎宗次が防衛のため惣門と環濠を備えた町を作ったのが始まりと伝えられている。16世紀になると、伊勢神宮への参拝客が徐々に増加し、神宮門前町の宇治山田へ食料品をはじめとする生活物資を運ぶ必要が生じてきた。そこで、町の中心を流れる勢田川を利用した船による水上輸送と船から陸揚げして人馬で宇治山田へ運ぶ陸上輸送の中継地「川の湊」として河崎は発展した。

江戸時代に入ると「おかげまいり」の参拝客を迎える物資の集積地、問屋街として大きく成長し、川の両岸には蔵が建ち並んでいた。江戸中期には山田奉行より伊勢神宮周辺地域の米と魚の卸売り先売権を認められ、名実共に「伊勢の台所」として全国に知られる商人の町となった。

現在も、河崎には当時の様子を今に伝える問屋や小売店が店を構えており、蔵や町家が並ぶまちなみが残っている。



小川酒店（伊勢河崎商人館）前の風景（明治末期と今）

※勢田川…宮川水系に属する全長7.3kmの1級河川。伊勢神宮に献上する調進物が川を上ってきたことから、古くは御幣川と呼ばれていた。

勢田川の流域には、「河崎」、みなとまち「神社」、船参宮で賑わった「二軒茶屋」などの各地区が連携してNPO伊勢「海の駅・川の駅」運営会議が作られ、「NPO法人神社みなとまち再生グループ」による定期航路（土・日曜日のみ）も運航されている。



醤油蔵を改修した「河崎・川の駅」

まちづくりのきっかけとなった七夕水害

河崎は明治時代も伊勢商業の中心として栄えたが、昭和に入り30年以降になると、輸送の主流がトラックに変わり、それにつれて水上輸送が激減、勢田川の水運としての役割は終わりを告げた。河崎のまちも次第に衰退していったが、その後、市が提案した河川改修計画を機に地元住民によるまちづくりが進められていった。

きっかけとなったのは昭和49年に起こった七夕水害後の河川護岸工事だ。昭和51年に建設省（現国土交通省）が発表した河川改修計画は、今後の水害に備え川幅を拡張するというもので、重要な町家や土蔵も多くが壊されることになる。そこで住民は、「これでは多くの歴史的なまちなみが消失する」との強い思いで立ち上がった。専門

家に依頼した調査結果でも、河崎のまちなみが持つ歴史的文化的価値は高く評価された。

河崎のまちづくり運動の変遷

河川改修が発端となった河崎のまちづくりは、「伊勢河崎の歴史と文化を育てる会」の結成（昭和54年）、「河崎まちなみ館」の開館（昭和57年）と繋がっていく。その後、改修工事の長期化や、まちなみ保存運動の停滞など幾多の問題を経て、河崎のまちづくりは、伊勢市の「都市」、「景観」の両マスタープランの公表と「小川酒店（伊勢河崎商人館）」の買い上げ、「NPO法人伊勢河崎まちづくり衆」の設立（平成11年）、そして「伊勢河崎商人館」の開館とその運営（平成14年）へと展開していく。

「伊勢河崎商人館」の概要

上記マスタープランによると、地区内に残る河崎商人の代表的な商家である小川酒店の建物（※）が姿を消す恐れがあった。そのため、地元の5団体（河崎町連合会、河有会、伊勢河崎の歴史と文化を育てる会、伊勢河崎・蔵バンクの会、河崎倶楽部）によって、小川家の修復整備に関する要望がとりまとめられ、平成9～10年に伊勢市に提出。その後、小川家、地元団体、伊勢市の間で協議がくり返された。

市は住民の申し入れを受け、建物は小川家から伊勢市に寄付、土地は伊勢市が購入し保存修復整備を行うこととなった。また、平成13年には、国の「登録有形文化財」に登録され、文化財としての価値も広く認められた。

※小川酒店は江戸中期創業の古い酒問屋で平成11年まで営業していた。

施設は、従来の公共施設のように行政が管理運営するのではなく、修復整備後は、地域に根ざしたNPO法人などの民間の組織に運営をまかせるという、市民と行政の協働による新たな仕組みが試みられることになった。そして平成14年8月に「伊勢河崎商人館」として開館し、NPO法人

伊勢河崎まちづくり衆がその運営を行っている。

「伊勢河崎商人館」は、蔵7棟、町家2棟、延べ1,000㎡。伊勢と河崎の歴史を紹介する河崎まちなみ館、貸店舗やイベントホール、会議室などで構成されている。施設は単に資料館としてだけでなく、河崎の商業活性化を図る拠点としても機能している。例えば、川沿いに建つ蔵では、趣味の品を販売したい人や将来自分の店を持つためのステップにしたい人に、

自身の作品等を販売できるブースやボックスを少額で貸し出している。また、伝統的な建物を生かした店を持ちたい店主に、町家や蔵を紹介する「空家・空蔵活用仲人事業」も行っている。



貸しブース、貸しボックスの様子

商人館をはじめ河崎を訪れる観光客は、年々増加してきており、今や全国各地からの来訪者があるという。



伊勢河崎商人館の母屋と壱の蔵

◇◇伊勢河崎商人館◇◇

- 開館時間
展示室：9:30～17:00
商人蔵：10:00～17:00
- 休館日
毎週火曜日（祝祭日の場合は翌日）
- 入館料
大人：300円、高校生・大学生：200円
小学生・中学生200円
- 住所：三重県伊勢市河崎2丁目25番32号
（JR・近鉄伊勢市駅または近鉄宇治山田駅から徒歩約15分）
TEL & FAX：0596-22-4810

「伊勢河崎商人館」には母屋や蔵などを利用した11の施設があり、そのひとつ「河崎まちなみ館」での展示物等の一部について紹介する。

◆山田羽書^{はがき}

伊勢御師が発行した山田羽書は、日本最初の紙幣として知られ、1600年初頭のものが最古といわれている。幕府貨幣の丁銀との引替を約束した銀貨兌換券（丁銀札）であり、起源は参宮客向けの貨幣の預かり手形といわれる。



私札のモデルとなった山田羽書

山田羽書は近畿各地で発行された私札（藩が公的に発行した藩札とは異なる個人が発行した紙幣）のモデルとなるもので信用も高く、宝永4年（1707年）に幕府正貨の流通促進のため藩札発行が禁止された際も例外とされ、明治維新まで流通した。

◆伊勢春慶^{しゅんけい}

伊勢春慶は、伊勢で作られ全国各地に出荷された漆器で、生活漆器として日本各地で使われていた。輪島塗などが、美しさを出すために漆を塗ったものであるのに対し、伊勢春慶の漆は、白木のままでは汚れや破損があるため、その保護から塗られたものである。起源の一つに、神宮の御遷宮に使用する御用材の端材を使用して木地を作り、それに漆を塗ったという説もある。

一般的に漆器は高価であるが、伊勢春慶は、塗りの回数を減らすなど、工夫をこらすことで価格を抑えて販路



伊勢春慶

を広げ、明治時代には丈夫で使い勝手の良い生活漆器として広く全国に流通した。高度経済成長期以降はライフスタイルの変化やプラスチック製品の普及などによって途絶えていたが、最近復活、その良さが改めて注目されつつある。

現在、伊勢春慶は「伊勢河崎商人館」の壺の蔵で購入することができる。

◆学生学芸員による資料の展示

商人館では、市内にある皇學館大学の学芸員資格を持つ学生を「学生学芸員」として登録し、



学生学芸員による蔵書の展示

河崎の歴史・文化の調査や研究の成果として展示を行っている。学生学芸員によって酒問屋の様子や企画展として商家の蔵書など河崎の歴史が紐解かれ、展示物から往時の様子を垣間見ることができる。（写真は現在の展示、「商家の蔵書」－問屋の主、和歌をよむ－ 期間は9月29日まで。）

NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆

NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆は、「伊勢河崎商人館」の管理運営を中心に河崎のまちづくりを推進していく組織として、河崎のまちづくり団体を結集する形で設立された。地域住民だけでなく、伊勢市内外で100名以上のメンバーがいる。

同NPOは、商人館の運営のほか野菜、海産物など地元の産品を販売する「伊勢だいでこ市（毎月第4日曜）」の開催や年に一度、まち中を使って行う河崎商人市、地元の情報を発信する「河崎かわら版（毎月）」の発行も行っている。



河崎かわら版と河崎商人市のチラシ

伊勢河崎まちなみ散策

河崎のまちには、商人館以外にもたくさんの蔵や商家が建ち並び、昔ながらの風情を残している。

以下に特徴のある風景の一部を紹介する。

◆世古

「世古」は、まちなみの細い路地のことで、伊勢独特の言葉である。名称の由来は、「迫る道」、つまり両方から迫りあった細い道という意味であるといわれている。河崎の世古は、道路と環濠や川・河岸を結ぶ道として造られたもので、雨水の排水路としての役割も担っていた。



世古

◆妻入りの町家

「切妻・妻入り」のまちなみは、河崎の大きな特徴である。その理由は、神宮の御正殿が平入りのため、同じでは畏れ多いということで妻入りになったといわれている。また、破風板(※)の形状も直線型の「直ぐ」、反った形の「反り」、盛り上がった形の「むくり」の三種類がある。

※切妻造りの屋根の妻側につけられた板



妻入りの町家と破風板形状のひとつ「反り」(右)

◆飾り瓦・隅蓋

どっしりした瓦拭きが特徴的な切妻屋根の飾り瓦もみどころ。家によっては屋根の隅に亀やカエル、桃などの縁起ものなどの隅蓋も見ることができる。



◆伊勢の注連縄

伊勢では玄関に注連縄が一年中付けられている。

「笑門」や「蘇民将 来子孫家門」など木札がついているのが特徴。



◆河辺の蔵

かつては川の両側に、川から直接物資を運び込むことができる河辺の蔵が建ち並んでいた。河川改修後は左岸の堤防道路にその名残を見ることができる。

河崎の蔵は、堅固な石積み为基础とした切妻の土蔵造りで、壁は厚く漆喰で仕上げられ、防火・耐震・断熱・保温にすぐれた構造となっている。さらに外壁は刻み囲いと呼ばれる伊勢地方独特の黒塗りの囲いで保護されている。

また、蔵は入口が川に向かって開いているため、荷物を満載した船が勢田川を遡って河崎に到着すると、船から直接物資を運び込みことができた。また、蔵は総じて間口が狭く細長い形状をしているが、これは船着き場のスペースが限られているため、できるだけ多くの船が接岸できるようにとの配慮からであった。

現在、「伊勢河崎商人館」の川側には特別修景地区がつけられ、水辺の石垣と蔵の景観を残している。



水辺と蔵の景観を今に残す

現状の課題と住民意識の変化

近年、生活排水の流入増加に伴い水質の汚濁や川底への泥の沈殿などの問題が生じ、学識経験者、市民代表、行政による「勢田川の浄化を考える懇談会」が立ち上げられた。住民の中にも「川は汚れ、町は暗い」といったどちらかというマイナス的なイメージではなく、「自分たちのまちの魅力を自ら認め、他に広めよう」というプラスの思考が最近、芽生えてきた。例えば、河川敷の花壇の整備や川の清掃、地域の歴史を紐解いて次の世代へ引き継ぐといった「自分でできるまちをよくする工夫」に取り組む住民の姿勢が随所にみられる。

まちを良くし、地域を活性化させる。そして、歴史的に重要なものを後世に残していく。その中心となるのは、河崎を愛する人たちのパワーに他ならない。(丸尾、井阪)